

「菊花の約」における「信義」について

——中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察——

中 田 妙 葉

A study of the concept of faith in “Kikka no Chigiri 菊花の約”

—— Further thoughts on the question of “Fan Ju Qing Ji Shu Si Sheng Jiao 范巨卿鶏黍死生交”——

Wakaba NAKATA

『雨月物語』は、序文によると上田秋成が江戸の明和五年（1768年）に書き上げた読本であり、九編の短編からなる。「菊花の約」はそのうちの一編であり、特に評価の高い作品だといえよう。例えば、佐藤春夫や谷崎潤一郎がこの作品に対して、「雨月中の一等だ」と絶賛していたことは有名である⁽¹⁾。佐藤や谷崎は、「菊花の約」が「すがすがしい精神」に基づいて書かれ、「信義を高潮した叙事詩」だと評しており、信義のあり方と、その表現方法に特に惹かれたようである。このように二大近代小説家を興奮させた作品であるにもかかわらず、この作品の解釈はいまだに落ち着かない。解釈は大きく別れ、様々に提議される。それはまるで、個々の研究家がそれぞれに異なる理解をしているかのようである。「菊花の約」の解釈上の問題点は、ほぼ以下の四種に分けることができる。

- 1、典拠である中国明代馮夢龍の白話小説『古今小説』第十六話「范巨卿鶏黍死生交」（以下「死生交」）と「菊花の約」間の信義論争。
- 2、左門が出雲に赴き、宗右衛門の敵討ちをする後半部分の重要性。
- 3、主題の解釈——「信義」か、それとも「軽薄」か——⁽²⁾
- 4、左門と宗右衛門の友情が衆道的である。⁽³⁾

このような問題がでてくる原因は多々あるが、ここでは重要だと考える2点をあげたい。

一つは、「菊花の約」は、ほとんどの構成を「死生交」に拠ったため、「死生交」の作品理解と創作の視点から「菊花の約」を解釈してしまうのではないかということである。翻案作品を鑑賞する

には、先行作品とは別の作品として創作されていることに留意する必要がある。しかしここでは、その認識を強調するのではなく、「菊花の約」がそれ程までに、「死生交」の構成を踏まえて創作されている、ということを確認しておきたい。

もう一つは、「菊花の約」の典拠として「死生交」と『史記・商君列伝』の公叔座と商鞅の故事以外に、まだ重要な中国古典作品があり、引用部分の本来の意味を考える必要があるのではないだろうか、ということである。創作であるから、全く先行作品とは異なる作品だ、と突き放して考えてしまうと、秋成が『雨月』創作で目指した方法を視界に置かないことになり、また現代においてまで感動せしめる作品となっている要因にも触れる事ができなくなってしまう。読本は、先行作品とは別物として鑑賞される必要性を述べながら、解釈を行うにあたり引用部分の意味の把握が重要だとするのは、以下の理由による。

一、『雨月物語』における主題と趣向について

小説において、主題は一貫性を批評の第一の要として重視される。それに対して趣向は、同一のもので、担う役割を変えられて、異なる部分に置き換えられる。つまり、一作品の主題から離脱して、異なる主題に結びつけられ、様々の場に任意に運用されるというのが趣向の性質である。そして、読本における趣向は、主題と分離して運用されるという独立性を持つため、読本作家の関心は、第二義的⁽⁴⁾な趣向の巧拙に注がれがちであった。

部分的な趣向の新規にのみ意が向けられることは、主題との緊密な調和への考慮がおろそかになり、主題の一貫性が保たれなくなる「趣向倒れ」という破綻をもたらす。それでも読本作家の評価は、ほとんどが趣向の運用の巧拙如何によって定められ、作家の技量を定める基準となっていたのである。しかしこのことは、読本作家の技量と認識は、先行作品に学ぶ場合でも、趣向または措辞といった第二義的なものの継承に止まり、第一義的な主題理法を継承するという、高度の摂取には及ばなかったことを示すに他ならない。

読本作家の創作における、以上の特徴をふまえたうえで、徳田武氏は上田秋成を、第一義的な主題理法を継承するという、高度な摂取ができた数少ない作家だと評する。氏の論文「読本における主題と趣向——庭鐘から秋成へ——」において、都賀底鐘の『繁野話』第八編「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈む話」から『雨月物語』巻四「蛇性の姪」への文体認識と主題との継承関係について論証を行い、秋成は、趣向を主題から分離せずに継承しつつ、新たな作品を創作できる作家であったと断じている。つまり、秋成は趣向のみにとらわれず、先行作品の内部を貫流する主題を継承しつつ自己の主題を確立し、新たな小説を創作することができる程の技量を持っていた作家だということである⁽⁵⁾。高田衛氏も、上田秋成が『雨月』以前に創作していた気質物作品において、「中国白話小説から受け取ったものはあるいは主題、あるいはモチーフの形でしめされる非情な虚構の認識」⁽⁶⁾であると論ずる。

更に、徳田氏は同論文の中で、秋成は文体についても、美辞麗句を採用するのではなく、内容と文体の相互関連を考え、一個の文体認識を確立しているとする。『雨月』文体の特徴として、理論が多く、緊迫した場面には漢文調を使い、また、情緒的な哀婉の場面には柔らかな和文脈を使うという、内容に随って硬軟両体を使い分けている点あげられる。つまり、内容と文体との、緊密な結びつきを考慮しているということである。秋成は、この主題と文体認識を確立する、または継承できる、読本作家では文学意識の高い、希有な作家であった⁽⁷⁾。これらは、秋成が創作において、主題の一貫性を保つために、プロットの詳細部分の内容においても、主題との調和を考慮していたということではないだろうか。

秋成が、先行作品の主題と一つ一つの部分的な内容に至るまでの表現に留意し、その作品世界を自らの作品に取り込むことを創作姿勢としていたというならば、作品の主題を解釈するにあたり、まさしく先行作品の世界観を視野に入れる必要があるだろう。また更に、『雨月』作品の内容と文体が緊密に結びついているならば、引用部分においても、先行作品の意味が継承されている、と考えることはできないだろうか。創作作品は作家が新たに創り出す別の世界だと処理する前に、その部分の先行作品における意味を視野に入れることで、創作にあたって引用された意図を、理解しようと考える。

そこで筆者は、秋成が趣向を取り入れる意味は、その表現の斬新さのみを用いるだけではなく、あくまでも、その一つ一つの引用箇所が表現する意味を、作品に取り入れることを目的としているのではないだろうかと考えた。そうであれば、『雨月』作品は、典拠の主題を辿っていくと、作者の考えが作品の主題となって、自ずと浮かび上がってくるという性質のものとはいえないだろうか。上記の「菊花の約」解釈の問題点を考察する二点目として、先行作品の探索と、その典拠内容の理解が大切だと提議したのは、この由縁による。

秋成は「菊花の約」の創作において、主題のみならず、引用した細部のプロットの意味さえも継承しているのではないだろうか。このように主題と趣向の双方から先行作品の世界観を取り込もうとする姿勢を持って創作されていることと、この作品が近代の大作家を感激せしめる作品となりえたことは、無関係ではないと思われるのである。

典拠である「死生交」では、二人がお互いの死生を問わず、永久に存続する信義に読者は感銘をうけるのだが、息を呑むほど生き生きとした怪異描写が、深い印象を残す作品である。上述した近代の作家達が賞賛した部分は、ほとんどが「死生交」のプロットを引用し、改作を加えているところである。このことから、「死生交」の小説世界は、「菊花の約」の世界を創作するにあたって、密接に関係し、重要な役割を持っていることがうかがわれる。秋成が「死生交」の描き出す信義に触れ、その信義に感動することがなければ、この傑作は世に出ることがなかったといえるのではないだろうか。多くの読本が話の展開の興味付けの為に、中国小説のプロットだけの引用をしているのに対し、秋成は中国小説の世界観を自らの創作に取り入れ、融合させるために、作品のプロットを引用したのだと理解しうるところである。

二、「死生交」の引用に関する問題

「菊花の約」の基本的なプロットは、中国明代の馮夢龍の白話小説『古今小説』第十六巻「范巨卿鶏黍死生交」の構成を基にして創作された。「死生交」の主題は純粹で一途な信義であるが、それは、登場人物の范式と張劭が、お互いに交わした約束を守らんとし、二人とも死を選ぶ、というプロットにより表現される。秋成は彼らの崇高な信義の表現を「菊花の約」に取り入れ、男同士の純然で厳格な信義を表現しようと試みたというのは、研究者の見解がほぼ一致するところである。本論では「菊花の約」が「死生交」のプロットを取り入れ、如何にして新しい表現を作り出したか、という論評は置いておく。この作品に魅せられた多くの先人達が、すでに豊富な表現力で、多くの論を展開しているからである。また、改編の意図は、「菊花の約」の主題を、主に信義の崇高たる美しさを表現せんがためであると論じられている。しかしながら、その信義には秋成の認識に立った世界がなければ創作とはならない。この問題について、勝倉寿一氏が仔細に典拠との対照研究を行ない、以下の見解を示している。

秋成は「菊花の約」を構想するにあたって、主人公達の身分や生活環境、および事件の設定を大きく変えていることを考え合わせるならば、「菊花の約」は、主題である「信義」の意味内容において、原典とは異なる独自の構想になるものであることがわかる。⁽⁸⁾

つまり、主題が原典と同じ信義であっても、その意味において異なるということである。そして、「菊花の約」の信義の意味内容を解明するためには、以下の二つの視点から考察することが大切ではないかと考える。一つは、中途半端と思われ、ゆえに必要性を疑われている後半部分を中心に、他の中国古典作品の引用と、それら典拠からの創作意図を考察することである。

しかしその前に、引用部分の意味を視野におきつつ、その上で原典と異なる部分が示す意図を理解することが、大切であると考え。これがもう一つの視点である。なぜなら、秋成が主題や文体認識を継承しているというのであれば、その改編部分こそ、秋成独自の認識を表現するに必要な創作だからである。更に、その改編部分に他の典拠が引用されていないか検証し、改編部分に引用されている典拠の意味を更に理解していく、という作業を丹念に行うことで、読み解くことができると考える。

ゆえに、まずは「死生交」の「菊花の約」における創作的役割を探索する必要があると思われる。秋成は「菊花の約」に「死生交」の信義世界を取り込みつつ、原典とは異なる信義の意味内容を表現するために、如何なる改編によって創作を行ったのだろう。その「死生交」の引用意図とは何であったのだろう。

典拠である「死生交」の引用が、示唆するところを考察するためには、まず、「死生交」の引用部分の意味を念頭に置きつつ、「菊花の約」に引用された結果、果たして原典と如何なる表現の違いが出てきているかを、検討することが大切だと思われる。その原典と創作間の距離を見つめるこ

とで、翻って「菊花の約」創作上での引用部分の意味が、見えてくるのではないかと考えるのである。以上の考えをふまえ、本論ではまず、「死生交」の引用意図について、考察を進めていきたい。

三、信義論争について

作者が「死生交」を引用して表現したかった信義とは、何であったのだろうか。それにはまず、始めにあげた一つ目の問題、信義論争について考えてみたい。

国内の研究者は「菊花の約」の信義が「死生交」よりも緊迫し、崇高であるとする。それに対し中国の研究者は、「死生交」の信義がより真実味のある、本来有るべき様相だとしている。かように二作品の信義に対して、どちらが真の信義かという論議が、様々に交わされるところだが、⁹⁾ 筆者は、秋成が原典の信義の含意や表現に惹かれたからこそ、「死生交」を下地にし、新たに自分の考えに基づいた世界を構築しようとしたと考える。そして、その信義内容は「死生交」とは別の意味をもつものであって、原典と較べて評価し得るものではないだろう。ゆえに、「菊花の約」の信義の含意を解明するにあたり、「菊花の約」の信義観のみから、または「死生交」と並べて二作品の信義観の優劣を論じることではない。しかし、問題原因として上記したように、信義論争が起ってしまうのも「菊花の約」の構成が余りにも「死生交」に拠っているからである。このことを見ても、やはり「菊花の約」における「死生交」の引用意図を探ることが、解釈上ですべて必要な作業だと再認識させられる。更に、秋成が「死生交」の世界を取り込もうとしたことが導いた創作結果であるならば、「菊花の約」単独で、または「死生交」のプロットとの比較という考察方法とは別に、「死生交」の世界観から「菊花の約」を考察するという方法も意味があるのではないだろうか。視点を変えることで、新しく見えてくること、または再度確認できることがある。創作の過程においても、この流れは自然であろう。「死生交」から「菊花の約」を考察することにより、秋成の改編で起こった、二作品の距離感というものが、把握できるのではないかと思われる。

宿久高氏の論文「論「菊花之約」与「死生交」的“信義”之異同」は、「死生交」の信義観から「菊花の約」を考察しており、「菊花の約」の信義観の矛盾する点を鋭く指摘している。そこで、宿氏のこれらの論を媒介とし、「死生交」の世界観からみた「菊花の約」の信義、および改編効果について、考察をすすめてみよう。

宿氏は、信義論争の焦点となる、「菊花の約」の宗右衛門と「死生交」の范式が自刎し魂となって駆けつける状況の違いについて分析し、以下のように述べている。（以下すべて筆者訳）

范式は「妻子を食べさせるために、心身を商いに没頭しており」「交わした約束の日を気にかけていなかったわけではなく、日々の雑用に気を取られて、その期日を忘れていたのである」、それに対し、宗右衛門は経久に監禁され城から出られなかったから（自刎したの——筆者注）である。「死生交」は個人の私的なことにより期日を忘れたのだが、「菊花の約」では期日を忘れた理由が、広い社会背景と歴史的事件とに関係しているということは、すな

わち期日を忘れた原因は個人的理由ではないといえる。⁽¹⁰⁾

と述べた上で、宗右衛門を厳しく指摘して、

(宗右衛門が一筆者注) 登用されずに監禁されたことが原因で、亡霊となって赴くということならば、つまりは人生の終結を意味することになり、死と少しも異ならない。もし同様に死ぬのであれば、このように幽霊となって「菊花の約」に赴くことではないほうが、更に面白かっただろう。⁽¹¹⁾

といている。

この論とは反対に「菊花の約」の信義の方がよいとして、中村幸彦氏は「原話の范式には約束失念の一事があって、信義に欠けるが、赤字は全く欠ける所がない⁽¹²⁾」といており、これが日本の読者が一般的にいただく感想のようである。また、典拠の設定に理解を示す評として、大輪靖宏氏の説がある。

范巨卿は、約束を心に掛けなかったわけではないけれども、匆々として一年を過ごしてしまい、当日(中略)初めて約束の日を思い出すのである。范巨卿の迂闊さを責めることは容易であるが、考えてみると、一年先の約束であるためつい忘れてしまったという方が自然でもある。たとえその日が二人にとって意味のある記念日であるにしても、一年中そのことばかりを考えているわけにはいきまい。(中略)但し、ありそうな話ということはそれだけ、この二人の約束に対する考え方が、我々平凡人に近いということであり、「菊花の約」に見られるような約束に対する強い緊張感というものが感じられない。⁽¹³⁾

大輪氏の説は、やはり典拠の「死生交」と「菊花の約」の信義を較べることが中心ではあるが、筆者はこの指摘に対し、そのそれぞれの信義としての立脚点が違うことを示唆しているところに注目したい。

「死生交」の信義が、「日常社会を基準にしている」という点において、大輪氏と宿氏は同じ意見である。さらに、宿氏が指摘するように、信義を守らんがために死を選ぶという構想は、信義のみを純粹に表現するのであれば、宗右衛門の状況は、范式より純粹さや厳格さを欠くとはいえないだろうか。なぜなら、宗右衛門は期日を目前にしながら、いつ放免になるかもわからない状況であった。相対して、范式は当然期日を延ばすことは可能であった。生きて張劬のところへ赴き、落ち度を詫げれば良かったのであり、これは日常的に常々起こりうることである。相手はもちろん失望はするだろうが、絶望という境地には至らないはずだ。以前のような信頼感を持ってないことは否めないが、友人としての交流は続けられる。このような状況下における決意だからこそ、何とんでも張劬を失望させたくないという思いが、強く厳格な信義感として表現されるのではなかろうか。日常生活において、もちろん間違いが起らないように細心の注意を払うことは大切である。しかし、もっとも重要なことは、失敗を犯してしまったときの事後処理方法であり、その時にこそ、その人となりの意識が顕著に現れるとみる中国人の価値観を、「死生交」のこのプロットは表しているように思われる。

これに対し、「菊花の約」の宗右衛門は、障害に阻まれそれを乗り越えるために、死をもって信義を守った。この設定は、もちろん期日を覚えていたとしても「死生交」の信義のあり方のみに焦点をあててみると、表現において見劣りがするといわれることは、理解できないだろうか。

「死生交」では“死”が軽く扱われ、効果的ではないという印象を受けるかもしれない。また、范式の約束を忘れた態度を、信頼を欠く設定だと見えるかもしれない。しかしながら翻って、“死”を効果的に使うことを考えるならば、処罰のために幽閉されていた宗右衛門の設定は、生きてそこを出られるかも分からない身であり、約束という束縛するものがなかったとしても、死を選ぶほか自由の身となる道はないようである。それに対し、范式は生きて再会することが可能である身で、敢えて死を選んだ。約束を守るというプロットを強調させるため、“死”のプロットがより効果的に使われているのは、やはり范式ではないだろうか。

この“約束のために死を選ぶ”プロットを導くため、原典では約束の日を忘れたという設定にし、日常に死を取り入れることで、范式の信義を強調したのだろう。それに対し、秋成は約束の期日を忘れることは人格上信頼を欠くとみて、宗右衛門を幽閉するという処置を行ったのではないだろうか。いわばこの改編部分は、期日を忘れることは信頼という意味で余り損失を見ず、結果的処理を重視する中国的な価値観と、期日を忘れるということですでに信頼に欠けると見なす日本の価値観が、顕在化している箇所ではないだろうか。

しかしまた、筆者は、このプロット設定の改編には、宗右衛門の頑なな信義感を表現するだけでなく、更に重要な意図があると考えている。つまり、プロットを、宗右衛門の幽閉に伴う死として誇張することが、主題を表現するにあたり必要だったのではなかろうか。これについて、宿氏も「期日までに帰ってこれなかったというのは、歴史事件の描写が重要であることに起因するのではなく、この作品の主題をより際立たせることを目的としたものである。¹⁴⁾と見ており、このプロットの改編は、主題を表現するために行われたことを指摘している。

四、結末プロットの解釈問題

宿氏は結末部分の違いに注目し、左門が信義を守ろうとする方法について疑問をなげかけている。「死生交」の中で、范式が死ぬ前に、「私は元伯の信用を失ってしまった。生きていて何の意味があるだろうか？人は千里は行けないという。だから死んでも、鶏黍の約を違えるようなことはしたくない。私が死んでも埋葬しないように。元伯が訪れて私の屍を見た後に土に埋めてくれ。¹⁵⁾」といい残すが、27日過ぎても元伯が訪れないので、棺は置かれたままであった。人が棺を運ぼうとしてもビクとも動かない。張元伯がやっと駆けつけ、弔文を取り出し泣きながら読み終えた後、再び范式の棺を動かそうとすると、果たして棺は難なく動いたのだった。宿氏は彼らの信義を賞賛して、

身体は死んでも、張元伯が屍を見るまで決して墓には入らないという、この決心の強さに、人は信義のとてつもなく大きな力を感じて感動するのである。張元伯は范式の行いに感動し

「弟が亡くなったというのに、兄一人がどうして生きながらえることができようか？」と遂に范式の棺の前で自決し、二人揃って死をもって信義を貫くことにより、我々は張元伯と范巨卿の間の「生死を問わず、永遠に存在する」篤い思いに心服するのである。⁽¹⁶⁾
 という。それに比べ、「菊花の約」の結末は表現において信義感が欠けているとする。

（左門——筆者注）が赤穴丹治を訪れ、宗右衛門の死の顛末を探知し、右門（恐らく宗右衛門のことであろう——筆者注）の仇を討つ。丹治を殺し、何処へか逃げてしまう。もちろん、相方が死をもって信義に殉じたことで、もう一方も同じようにすることが信義を守る唯一の方法ではない。しかし作品の出来からいえば「死生交」に比べ「菊花の約」の信義を守るあり方は非常に見劣りがする。⁽¹⁷⁾

事実、「菊花の約」の結末に対する評価は、国内の学術界においても高くはない。重友毅氏は左門が出雲に赴く結末部分は余分だとして、

前段からこの段へかけての後日譚は、いかにも後日譚らしく無難に収拾されているだけで、特に心をひかれるほどの箇所はない。この作品の妙所は、はじめから、いわゆる「菊花の約」が果たされるまでであって、その限りにおいては、一個の別の世界が、それなりに間然するところのない妙筆をもって描き出されているといつてよい。⁽¹⁸⁾

といい、中村幸彦氏も左門の行為は不可解だとしている。

出雲へ行く左門の行動には、原話の友の霊の依頼というごとき説明がない。直情径行、友の死の地を見ないではおれない心情にかられたと解すべきか、はじめから赤穴丹治への復讐をこころがけたからか明らかでない。丹治への復讐と解すれば、どうもちょっとそぐわぬ的はずれな気がする。秋成が左門を、そうした性格と写していると見て来た私は前者と解しておく。⁽¹⁹⁾

宿氏は完全に「死生交」の信義観から「菊花の約」を鑑賞していることから、「菊花の約」の信義の守り方は、「死生交」から離れているだけでなく、原典にも及ばないと感じるのだろう。当然彼の説はそれなりに理があるといえるが、先に述べたように、筆者は秋成が原典の後半を改編した意図は、左門が信義を謹んで守ったことのみを表明するためではなく、宗右衛門の死の顛末を探知するためではないかと考える。なぜなら、もし左門が宗右衛門の変わりに、丹治に手を下すことが目的であれば、重友氏が指摘するように、後半の内容は主題に対しほとんど役を果たさないことになる。ゆえに、中村氏が「そぐわない」と首をかしげることになるのではないか。もし、後半のプロットには、他の意味があるとしたらどうであろう。作者は本来、この結末部分に重要な意味を含ませ、顕わそうとした。しかし、同時に「死生交」の全構成において、結末のプロットが浮いてしまうこと、つまり重友氏がいうように、結末が「後日談」になってしまい、小説構成の協調上、整合性に問題がでてくるということを顧慮したのではなかろうか。だから秋成は、前半部分と後半部分の大きな構想の枠組みを自然につなげるために、左門の性格と感情を、中村氏が思ったような比較的感情的で感傷的なものに仕立てたのだろう。なぜなら、「死生交」と「菊花の約」間の異なるプロットを仔細に照らし合わせると、それらのプロットが全構成への関係において、すべて結末部

分に集約していることが見えてくるからである。仔細に改編した部分が、結末へ集約する上で、どのような役割をもっているか、以下に考察を述べていこう。

五、改編部分と結末の関係

改編した部分と、結末との関連は、以下の三項目にまとめることができる。

1、二人の知り合った状況と背景の違い——悲劇の提示

張劭と范式は洛陽で行われる科挙に参加する旅の途中で知り合う。それに対し宗右衛門は、出雲に帰る途中、左門の住む里で左門と知り合った。宗右衛門は、君主塩冶の仇である尼子経久を討伐することを、佐々木に勧めたため幽閉されたので逃げ出し、一日も早く故郷に帰り、その政情を自らの目で確かめようとした。宗右衛門の帰郷への意思はかたい。しかし故郷の出雲の政情は不穏であり、更に彼は旧主塩冶の軍師であった。それは、彼が帰郷することは危険であるに違いないと、読者に想像させ得る設定である。つまり、宗右衛門に設定された背景より、話の始まりですでに、彼に悲劇が起こりうる可能性を提示しているのである。

2、兄弟の契りを結ぶ直接原因の差異——左門の心の情景の明示

范式は張劭の“骨肉の情”にいたく感動し、兄弟の契り結ぶことを求めた。それに対し、「菊花の約」の兄弟の契りは、左門が宗右衛門の人柄や信念など、全人格への共鳴から成り立つものであった。この改編の意味を考えるにあたり、宿氏の次の指摘が参考となるので引用する。

張元伯は范式をたすけるため、人生の前途をかけた科挙の機会を失い、この機会のために彼は弟の前途まで犠牲にし、嫁も取らず、哀れに30年の歳月を送っていたのである。もし范式を助けなければ、殿試に合格していたかもしれないのだ。そうすれば、書生があつという間に高官になり、清貧から抜け出ることができ、裕福な生活を過ごすことができたであろう。しかし范式を助けるため、正義と勇気を奮い、毅然と自分の全てをかけた。(中略) 張元伯がこのように大きな犠牲を払って范式を助けたのは(中略) 張元伯の思想には、人に対して「義」を重しとするという理念が、始終一貫していたからである。「死生交」の信義は、始めからこのような堅い基礎の上に成り立っていた。ところが、「菊花の約」は違う。左門は(中略) 病を治し細心の気を払うこと以外、何の犠牲も代価も払ってはいないではないか。(中略) ゆえに「死生交」に比べ「菊花の約」の信義の基礎は、はじめからとても薄弱であったといえる。²⁰⁾

このような考え方は国内の学者ではまず見られない意見であるが、筆者には左門と宗右衛門の義を結んだプロットの意味するところを客観的に分析した見方だと思える。

『雨月』が書かれた天明期では、左門のような儒者の社会的立場は、不安定であり、また孤独であった。徳川幕府が堅固な世襲社会を作り上げたことで、その頃、多くの儒者などの知識人は、才

能を持ち、学問を深く身につけていながら、社会の中核でその才能を役立たせることが非常に難しかった。「幕初にあつては儒を学ぶ士も、一国の師表として政治文教に参画し、あわよくば天下の政治にも関与する機会がないではなかつた。(中略)が享保をこすと、飽和度に達した職分はことごとくを不可能にする。世襲制度一つをとつても、自由な個性の進展を阻害する社会状勢に立ち至つたのである。²¹⁾」「安永天明の徳川社会では、享保頃の特徴は一段と進行して(中略)才能登用の途は全くとざされる。(中略)世襲制の悪癖は、職にあつて文事に預かる人々に才能を欠乏せしめた。そして真の才能は、遺賢として野に満ちた。²²⁾」

この社会の実情が彼らに与えた衝撃は大きく、儒者達は否が応でも社会に対する失望を感じずにはいられなかつた。またそれは、彼らの精神的追求の先が、自然に現実から離れ、理想や理念に向かわせるということになる。国情が日本と中国は異なるから、友情を結ぶ設定に科挙を使うことはできず、だから話の設定や構成が異ならざるを得ないのだ、と作品を解釈することは可能ではある²³⁾。しかしそれで「菊花の約」のプロット設定の解釈が、十分であるとは思われぬ。なぜなら筆者は、作者には左門を社会の辺境に存在する人物として設定する、創作意図があつたのではないかと考えるからである。その理由を、宿氏の論文を引用しながら、以下に述べたい。

宿氏は厳格に左門を批評している。

左門はもちろん学問に志しているが、目的は全くない。身分は儒者であり、深くて豊富な知識を身につけてはいるが、彼の知識はただ他人に伝授することのみであり(中略)ただ我が道をすすみ、あくまで自己の理念の中で生活している。換言すれば、左門はもちろん現実社会で生活はしているが、現実に居ながら(現実を——筆者注)振り返らない“非生活者”である。²⁴⁾

更に、宿氏は、左門は「自ら好んで現実から離れているのだ」と指摘している。左門の母は、左門が宗右衛門のような立派な兄を持ったことをうれしく思い、宗右衛門に向かって「吾子不才にて。孝ぶ所時にあはず青雲の便りを失なふ。ねがふは捨ずして伯氏たる教を施し給へ。」というが、この左門の母の言葉は、その指摘を裏付ける。

兄弟の約を結ぶことを、積極的に求めたのは左門であり、その渴望の根源は、ずっと孤独を抱える彼の心であつた。そのことは以下の描写からうかがえる。

此日比左門はよき友もとめたりとて。日夜交はりて物がたりすに。赤穴も諸子百家の事おろおろかたり出て。問わきまふる心愚ならず。兵機のことわりはをさをさしく聞えければ。ひとつとして相ともにたがふ心もなく。かつ感。かつよろこびて。終に兄弟の盟をなす。

左門は自分でも「母なる者常に我孤独を憂ふ」といっており、左門の母が、彼の孤独をずっと心配していたという心情を、間接的に表現している。

また、左門の妹が嫁いだ佐用が「屢事に託て物を餉る」といっても、左門は「口腹の爲に人を累さんや」と、受け取らなかつた。更に、訪問先の主人が、左門に病がうつると心配し、宗右衛門の側に行かない方が良く忠告しても、左門は主人に向かって「死生命あり。何の病か人に伝ふべき。

これらは愚俗のことばにて吾們はとらず」というなど、彼の態度は、貧しくとも心高くあろうとする意識をあらわしている。しかしながら、このような姿勢は反って、彼を、自然と孤独な状態に追いやることにもなり得る。ゆえに、狭量である、という評がなされるところである²⁵。この言葉は作者による改編であり、原典の張劭の言葉には、彼が孤高であることをうかがわせるような箇所は少しも見うけられない²⁶。ところが、左門の描写には、話の初めから、彼が現実から離れている姿勢が表されており、同時に彼の心は、自分では拭うことはできず、さりとて寂しさを慰めてくれる友もない孤独感に襲われていた、ということがうかがえる。これは孤高の人の典型的な心情ではなかろうか。この孤高の人左門は、全人格面で合わないところがないという宗右衛門と知りあい、友人となることによって、長年孤独感を抱えていた心に喜びが訪れた。宗右衛門は左門にとって心うち解ける親友であり、唯一無比の存在なのである。

ゆえに「赤穴は、実学に携わる者でありながら、左門と同様に思想の研究者でもあった。しかも、武家の倫理の基盤には儒教があるから、赤穴も左門と倫理観を同じくする人といえる。二人が意気投合するのは当然といわなければならない。²⁷」という意見もあるが、人物背景のみで二人の友情を理解するには不十分であるように思う。なぜなら、左門という現実から離れた人物描写をみるに、同じように、現実社会に影響を受けても考えが変わっていくことのない、純粹で気骨のある人格者こそが、左門の共感を得る人物だと思われるからである。つまり、孤高であるゆえに孤独な心を抱える左門と、倫理に沿って実行しようとする勇気をもった人格者の宗右衛門でなければ、成り立ち得ない友情だと思われる。

宗右衛門の人格を理解するための描写は少ないのであるが、以下の三点をあげることができる。一つに、宗右衛門は主人の不幸を知り、塩冶の君主である佐々木に尼子を討伐する戦法を勧めるが、臆病な佐々木は反対に、宗右衛門の行動を阻止すべく監禁する。このことは宗右衛門が勧めた行動は、十分に危険を孕み、また勝算が難しい事柄なのだろう、ということがうかがえる。しかし、それでも彼は、武士の理念に従って、主人の仇を討とうとした。二つに、彼が帰ろうとする出雲は、彼にしてみれば敵地と化してしまったことに代わりなく、生きて帰れる可能性は少ない。彼もその危険を知っていて、それでも自らの目で当地の状況を見ようと、出雲に向かった。三つに、もしこれらの行動を見て、彼は早計に行動を起こす人間だということであれば、左門が宗右衛門と朝夕ともに話した一段に、注意すべきである。宗右衛門は「諸子百家の事おろおろかたり出て。」という落ちついた物腰であり、とても素朴な様子であることがわかる。以上の表現描写から、宗右衛門の性格が、純粹で素朴というだけでなく、自分の理念を信じ、現実にかかる困難を厭わずに向かい合おうという義気を持つ、実直な人格だということをもみてとれよう。

これより、左門の宗右衛門に対する感情を、以下のように理解できないだろうか。宗右衛門は学があるだけでなく、実直である。そして、話の中でより大切なことは、現実から逃げない強い意志と義気をもつということである。その彼の姿勢は、自身の崇高な理念をもって、現実社会における困難な問題の対処に、全身全霊をかけて務めようとし、理知と志気の双方ともに高くあろうとして

いる。崇高な理念は持つが、現実にはたずさわらない左門にしてみれば、宗右衛門は、現実には真っ向から果敢に相対そうとする姿勢をくずさない、敬服せずにはいられない人物であった。以上の理由をもって、宗右衛門は真摯に現実に対峙しており、それゆえに左門の尊敬と敬慕を受けられたのだ、と筆者はみる。彼が、現実の垢に染まっていない、純粋な人物であるとはいえるが、現実から離れている⁸⁸という評はあたらないと思うのである。

左門の人物像に、当時の典型的な文人の姿を見ることができるとすれば、宗右衛門は、当時の文人の理想像といえるだろう。つまり、左門が“理想的な非生活者”像だとすれば、宗右衛門は“理想的な生活者”像だといえることができる。ゆえに、左門が宗右衛門に出会ってからというもの、孤独な彼の心は、やっと満たされることができたといえる。つまり、「死生交」の兄弟の盟は、はじめから義を第一とする理念を基礎として起こりえたのに対し、「菊花の約」の兄弟の盟は、義を重視する理念以外に、左門の宗右衛門に対する強い敬慕の念があってこそ、結ぶに至ったということがみえてくる。筆者は、宗右衛門に対する、この左門の、理想の実現者という尊敬と、無二の存在という愛慕の念こそが、プロットの発展において重要な役割を持っていると考え、後半部分へ導く鍵であるとみる。そのことを、二人の相互感情の交流に着目して、以下に説明しよう。

3、二者間の感情の交わりの違い——宗右衛門の心の趣き

左門の宗右衛門への尊敬は、兄への憧憬と敬慕の念をおこさせた。また、宗右衛門は、左門の純粋で誠実、そして情の深い性格に加え、自分に対する敬慕を感じ、自然に彼を、弟として保護しようとする感情と責任感が湧いてきた、とみることができる。理由は以下の描写による。

左門の母が宗右衛門に、左門との交際を願ったとき、宗右衛門は「大丈夫は養を重しとす。功名富貴はいふに足ず。吾いま母公の慈愛をかふむり。賢弟の敬を納むる。何の望かこれに過べきと。」と答え、さらに彼が出雲に赴く時には、自ら「吾近江を遁來りしも。雲州の動静を見んためなれば。一たび下向てやがて歸來り。菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。」とのべ、出雲の様子を一目見たらすぐに左門の元に戻り、その後は左門親子と一緒に暮らそうと考えていた。なぜなら彼は「吾父母に離れまいらせていても久し。」であるので、左門と兄弟の約を結ぶときに、自ら「賢弟が老母は即吾母なれば。あらたに拝みたまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯給はんや。」と、老母に自分を受け入れて欲しいと願っている。ひとり身の孤独な宗右衛門が、左門親子の温かい心遣いを受け、まるで自分に母や弟ができたような温もりを受けたことに感動した、ということがわかるであろう。また、彼の真っ直ぐな性格から、出雲から帰ってきた後は、彼らの恩に報いたい、老母に孝行を尽くしたいと願うことは、とても自然な発想だと思われるのである。

(1) 宗右衛門の母へ対する想い

これらのプロットの改編に原典を照らしてみると、作者は宗右衛門の左門親子に対する親愛の情を表現しようとしていた、という創作意図を見いだせる。原典では、范式と張劭が別れるときに、范式から張劭の母に挨拶をしたいと申し出るが、范式は張劭の母に会ってはいない。またその言葉

から読み取れる感情も、礼儀的形式の範囲をこえるものではない。

范式曰「(中略) 幸賢弟有老母在堂，汝母即吾母也。来年今日，必到賢弟家中，登堂拜母，以表通家之誼。」(范式は「幸い弟君にはお母上がいらっしゃる。君の母上は私の母でもあるのだから、来年の今日には、必ず君のお宅へ伺って、お母上を拝み奉り、お家への友誼を示しましょう。」といった)

一年後の九月九日の重陽節に張劭の家へ訪れ、彼の母に挨拶をしたいというのだった。つまり、「母への挨拶」という構想が原典における意味は、范式が張劭家への敬意を表し、またその行為をきっかけに、彼らの再会を具体化させることにある。それに対し、宗右衛門が左門の母への挨拶を求める時の最後の一句、「老母あはれみてをさなき心を肯給はん」は、老母が彼の気持ちを受け入れてくれることを、心から願う気持ちが手に取るように感じられるくらい、少々激しい感情表現となっており、原典とは大きく異なる。幼いときに亡くした母への思いを、左門の母に投影しているのだろう、と読者に彼の心を感じさせる表現である。

(2) 身分の違い

もう一度、宗右衛門が左門の母に感謝を示した一言、「大丈夫は養を重しとす。功名富貴はいふに足ず」を引用したプロットの意味に注意してみたい。原典では話している人物の立場が全く反対である、張劭は范式のことがあって試験に間に合わず、名を立てる機会を逸してしまった。范式はこのことにいたく申し訳なく思い、心から張劭にわびる。張劭はその言葉を聞き、范式を慰めて「大丈夫以义气为重，功名富賈，乃微末耳，已有分定。何誤之有？」(一人前の男は義を重んじ、高名富貴ごときは取るに足らないものとします。すでにその認識の分別は明解なわけですから、機会を逃したなどとんでもない。)と、言うのだった。本来この言葉には、相手への慰めと、恩を施した者の理念が示されているが、作者秋成はこれを宗右衛門に語らせることで、張劭という人柄の高尚さを、流浪者の宗右衛門に吹き込んだのだ。

宗右衛門は左門の母から「ねがふは捨ずして伯氏たる教を施し給へ。」と左門との交流を願われた時、自分の理念を示すとともに、同時に母を安心させたいという配慮を込めて、この言葉を述べている。この情景は、左門の母が、彼をたいへん尊重していることを示しており、また、宗右衛門が、左門親子の深い思いを、丁重に受け入れたことを表しているといえよう。

このようにみると、宗右衛門の立場が少々持ち上げられていると映るかもしれない。実際「菊花の約」は「死生交」に対し、人物の性格のみならず、人物の身分においても異なった設定をしている。「死生交」の二人は農民と商人であり、彼らは身分的に平等の関係である。しかし「菊花の約」の二人の身分は違う。宗右衛門の身分は出雲の富田城の城主に仕える武士であり、出雲に反乱があったことで一時的に流浪の武士となっているだけである。左門は儒者であるが、それ以上のことは記されていない。身分制度の厳格な当時の江戸社会において、儒者というのは、唯一社会階層の拘束を受けない身分であった。彼の生活は清貧であり、左門の母が終日布を織るなどの仕事をしているという説明からみて、彼の家は農業で生活を支えていたといえる。つまり、左門親子と宗右衛門

の社会的身分は全く異なり、普通はおこり得ない友情といえよう。このことより、二人の友情をより自然に発展させるため、宗右衛門の人格設定に手を加える必要があり、その描写のために改編が行われた。そして、彼らの“身分違い”という設定は、主題を自然に導かせ、説得力をもたせる意図がある、と筆者は考える。

これより後半のプロットは、「死生交」から離れ、彼らそれぞれに内包する異なった感情を基礎にして、展開していくことになる。

六、「死生交」改編の意図

以上の考察より、「菊花の約」は男同士の純粋で厳格な信義と、また彼ら二人の高尚な理念と人格を表現するために、「死生交」のプロットを引用したことが確認できたであろう。また作者がどの様に「死生交」のプロットを改編したかということに注目することで、「菊花の約」には、更に多くの意義が内包されていることも明らかになった。作者は「死生交」の描写を細部にわたって改編することで、二人の感情の細微な部分まで描き出そうとし、文章の行間に、それぞれ抱いている感情の情景を、浮かび上がらせたのだった。特に重要な内面の様相として；左門が追求した理想の姿勢と、彼の心の孤独、またそれゆえに胸のうちに起こり得た、宗右衛門への無二の存在としての敬慕の思い。そして宗右衛門が左門の兄として自覚を持ち、彼ら親子への親愛の情と、彼らを守ろうとする責任感を持った、ということあげることができる。

つまり、作者秋成は、左門の心情の孤独を描き、宗右衛門の高尚な人格と、左門親子に対する誠実な感情を描き出すために、原典のプロットに改編を加えたのであり、それは、二人の内面を描き出すことによって、身分の違う彼らが、互いに“知音”の情を持ち得たことを、自然に展開させるためであった。

「死生交」の改編について最後に注意したいのは、所謂“後日談”と呼ばれる後半部分である。信義を表現するため「死生交」のプロットを引用したはずであるのに、信義が完結する肝心なプロット——范式の亡霊に言われたとおり范式の棺の前に訪れた張劭は、范式の信義に報いるために、その場で自刃する——を削除し、それかわりに、左門が宗右衛門を監禁した赤穴丹治を叱責し、斬殺するプロットに変えている。つまり、「死生交」の信義は、「菊花の約」では完結していないということである。宿氏が、「左門は何の犠牲も代価も払っていない」という指摘をし、「死生交」の信義こそが真実だ、という印象をもつのも肯げよう。「死生交」の引用の目的が、本当に信義を取り込むためだったのか、と怪しく思われてくるのも無理はない。しかし反対に、左門が宗右衛門を思い、行動を起こさなければ、信義が完結しない、ということも明白になる。

左門は確かに張劭のように、死をもって信義をあらわし、完結させたわけではない。しかし、作者秋成が左門に託した崇高な信義を完成させるためには、出雲に赴く結末は、決して欠かすことのできないプロットであるということは、理解できないだろうか。そして、全構想へかかるリスクを

負ってまで改編した意図として、作者がその話の中に主題を潜ませているとみることも、もっとも自然だろう。だからこそ、前半部分のプロットと、主題を抱えた後半部分との結びつきにおいて、話の構想の展開が自然になるように、作者は「死生交」を引用した前半部のプロット中で、二人それぞれが抱いていた心の趣や感情の様相に対して、特に注意を払い、仔細に描き出そうとした。

以上の考察から、筆者は「死生交」の改編において最も重要なことは、左門が宗右衛門に無二の存在であるという認識をもち、今まで身をおいていた非現実な世界から、現実に向かわせる程の思いを抱くことを、自然に表現することにある、という結論にいたった。なぜなら、左門のその思いこそが、後半部分を自然に繋ぐ、要となる要素だからである。それを更に裏付けることとして、左門が宗右衛門と再会の念を再三押す部分——所謂“衆道説”が唱えられている個所である——は「死生交」のプロットに加えて、さらに他の中国の小説を重ねていることが見受けられる。このように多数の小説描写を重ねて改編する意図とは、すなわちその部分の構想を強化することにある、とみるに難くないであろう。

つまり、「死生交」の「菊花の約」における意義とは、秋成が問いかけたい信義を表現するにふさわしい、表現内容における媒介なのであって、中核的思想を「死生交」から取り入れようとしたのではないといえよう。それゆえ作者が「菊花の約」であらわしたかった信義とは、「死生交」の信義とは違う質のものであるから、決して両者を比べられるものではない、と強く思うのである。

「菊花の約」の主題は、何であるか。本当に信義なのだろうか、という議論も他方にある。改編の様相からみると、「菊花の約」の信義は「死生交」のように二人の間に止まらない、他者が存在してはじめて完結されるものだ、というようにみることができる。それを述べるには、後半部分を他の中国典籍から読み解かなければならない。また後の機会にゆずることにしたい。

（なかた わかば・本学経済学部講師）

「菊花の約」は『上田秋成全集』第七卷（中央公論社、1990年）によった。

「范巨卿鶏黍死生交」は『喻世明言』（中国和本体系、江蘇古籍出版社、1995年）によった。

引用文の日本語訳は、すべて筆者による。

注

- (1) 佐藤春夫著「あさましや漫筆」（『別冊現代詩手帖卷之三』思潮社、1972年）260-1頁。
- (2) 最近では、小椋嶺一著「『菊花の約』論—信義から軽薄へ—」（『秋成と宣長』翰林書房、2002年）がある。
- (3) 代表的な論文として、松田修著「『菊花の約』の論——雨月物語の再評価（2）——」（『文芸と思想』24、1963年2月）がある。
- (4) 中村幸彦氏は文学作品評価の基準から、主題を第一義的、趣向を第二義的と表現している。（中村幸彦著「戯作論」『中村幸彦著述集』第八卷、中央公論社、1982年）142-177頁。
- (5) 徳田武「読本における主題と趣向——庭鐘から秋成へ——」（中村博保編『日本文学研究資料叢書 秋成』有精堂、1972年）142・150頁。
- (6) 高田衛著『上田秋成研究序説』、寧楽書房、1968年、56頁。
- (7) 注(5)に同じ、150頁。
- (8) 勝倉寿一著『雨月物語構想論』、東京、教育出版センター、1977年、94頁。

- (9) 宿氏はその論文中で、「死生交」の主題は死をもって信義を遂げた完全な「信義」を主題とした作品であるが、「菊花の約」の主題は正真の「信義」だろうか(原文:「《死生交》以死遂信, 完全是以“信义”为主题的作品, 但《菊花之约》的主题是否也是真正的“信义”?)と疑問を投げかけ、「菊花の約」の「信義」は大いに賞賛できるものとはいえない(原文;「这种信义是否该大加赞赏呢?」)、という説をとらえている。宿久高著「論「菊花之约」与「死生之交」的“信义”之异同」(于長敏、宿久高主編『中日比較文学論集』(続編)、吉林大学出版社、1993年)149頁。
- (10) 原文は以下のとおり;「范式‘为妻子口腹之累, 溺身商卖中。’‘向日鸡黍之约, 非不挂心, 近被蝇利所牵, 忘其日期。’宗右卫门因被经久监禁而不得出城。《死生交》因个人私事而忘期;《菊花之约》把忘期的理由与广泛的社会背景和历史事件联系在一起, 即忘期的原因是非个人的。这种把未能赴约归因于历史事件的描写至关重要, 是直接为突出作品的主题服务的。」注(9)に同じ、146頁。
- (11) 原文は以下のとおり;「不被重用乃至被监禁, 形若行尸走肉, 即意味着人生的终结, 与死全然无异。若同样是死, 莫如此以身死赴‘菊花之约’更有意义」。注(9)に同じ、146頁。
- (12) 中村幸彦校注『上田秋成集』日本古典文学大系56、岩波書店、1969年、11頁。
- (13) 大輪靖宏著『上田秋成文学の研究』笠間書院、1976年、53頁。
- (14) 原文は以下の通り;「这种把未能赴约归因于历史事件的描写至关重要, 是直接为突出作品的主题服务的。」注(9)に同じ、146頁。
- (15) 原文は以下のとおり;「我失去元伯之大信, 徒生何益? 常闻人不能行千里, 吾宁死, 不敢有违鸡黍之约。死后不可葬, 待元伯来见我尸, 方可入土。」
- (16) 原文は以下のとおり;「虽然身死, 不待张元伯见尸决不入墓。决心之大, 令人感动信义的巨大力量。张元伯深为范式的行为所动, ‘兄为弟亡, 岂能独生耶?’遂在范式柩前自刎而死, 二人均以死恪守了信义。至此, 我们无不为张元伯与范巨卿之间‘生死不渝, 亘古长存’的笃情所折服。」注(9)に同じ、148頁。
- (17) 原文は以下のとおり;「访赤穴丹治, 探明宗右卫门死之原委, 为右门报仇。杀了丹治, 继而逃之夭夭。当然, 彼方以死殉信义, 此方亦同并非尸恪守信义的唯一方法。然而就作品而言, 和《死生交》相比, 《菊花之约》恪守信义的方式不能不说是黯然无色的。」注(9)に同じ、148頁。
- (18) 重友毅校注『雨月物語評釈』明治書院、1954年、156頁。
- (19) 中村幸彦編『秋成』日本古典鑑賞講座 第24巻、角川書店、1969年、86-7頁。
- (20) 原文は以下のとおり;「张元伯为帮助范式, 失去了决定命运前途的应举机会, 而为了这次机会, 他牺牲了弟弟的前途, 不婚不娶, 惨淡经营三十年。若不帮助范式而前去应举, 或许金榜题名。由书生摇身变为高官, 摆脱清贫, 过上充裕富足的生活。但是, 为了帮助范式, 他却义无反顾, 毅然牺牲了自己的一切。……然而张元伯做出如此之大的牺牲去帮助范式, ……在张元伯的思想中, 对人以‘义’为重的理念是贯穿始终的。《死生交》中的信义一开始就是建立在这一牢固的基础之上的。《菊花之约》则不然, 左门……除了想方设法为其治病, 细心照料外, 并没付出什么牺牲或代价。……因此可以说, 与《死生交》相比, 《菊花之约》的信义的基础一开始便极其薄弱。」注(9)に同じ、145頁。
- (21) 中村幸彦著「近世文人意識の成立」(『中村幸彦著述集 第十一巻』中央公論社、1982年)379頁。
- (22) 注(21)に同じ、388-9頁。
- (23) 宿氏は後に、この論文では日中の国情の違いに注意を払わずに解釈をした、と述べている。
- (24) 原文は以下のとおり;「左门虽然也在读书, 但无明确目的, 他身为儒生, 有着渊博丰富的知识, 然而他的知识仅仅用于授他人……我行我素, 一味地生活在自己的理念中。换言之, 左门虽然生活在现实社会中, 却是一个置现实不顾的‘非生活者’。」注(9)に同じ、144頁。
- (25) 木越治著『秋成論』ペリカン社、1995年。
- (26) 「死生交」では以下のとおりであり、張劭の言葉は独善的や、高慢という形容は当たらない。「劭曰: “死生有命, 安有病能过人之理? 吾须视之。”(人間の生き死には天命によります。人を過つ病などありはしません。私は彼を見舞わずにはおれないのです)。
- (27) 長島弘明著『雨月物語の世界』筑摩書房、1998年、98頁。
- (28) 最近では、高田衛氏の「永遠の放浪者」論を受けて、小椋嶺一氏が「知識だけに満足する学者になり下がって」いたと論じている。(『秋成と宣長』翰林書房、2002年)230頁。